

Title	京都大学言語学懇話会 1991年度活動報告
Author(s)	
Citation	言語学研究 (1991), 10: 195-205
Issue Date	1991-12-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/87956
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都大学言語学懇話会
1991年度活動報告

第25回例会

1991年4月4日(木) 午後1:30~4:45

京大会館211号室

研究発表

「フランス語の『分裂疑問文』について」

平塚 徹(D2)

「アナトリアの諸言語と印欧語比較研究」

吉田和彦(京都大学)

第26回例会

1991年7月19日(金) 午後1:30~4:45

京大会館211号室

研究発表

「主題と条件に関する覚え書き

— 日本語のいわゆる条件形式『なら』をめぐる諸問題 — 」

有田節子(D1)

「名詞句の主語と θ 理論」

中村裕昭(海上保安大学校)

第7回大会(第27回例会)

1991年12月7日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館211号室

開会の辞

西田龍雄 教授

研究発表

「無声化の話者差と無声化母音の知覚について」 吉田夏也(D1)

「文の同義性と深層格 — 名詞句の相互交換を中心に — 」

定延利之(神戸大学)

\bar{A} -dependencies, subordination, and the structure of CP

豊島孝之(D1)*

「機能範疇の認可と節の構造」

上山あゆみ(京都外国語大学)

「スワヒリ語における主語交替現象について」

小森淳子(D1)*

「初期ロシア年代記の成立とその言語

— 『過ぎし年月の物語』における語りのスタイルについて — 」

佐藤昭裕(京都大学)

* 本誌掲載の同著者による論文を参照。

フランス語の「分裂疑問文」について

平塚 徹

フランス語の構成素疑問文には、(1a)のように倒置によるものと、(1b-c)のように"EST-CE QUE"によるもの[以下、分裂疑問文]との二種類を認めることができる。

(1) a. Comment s'écrit ce mot ? ・この単語はどう書くのか？

b. Comment est-ce que ce mot s'écrit ? ・(同上)

c. Comment est-ce que s'écrit ce mot ? ・(同上)

[以下、(c)の型は、(b)の型と同様に振舞うので省略する。]

さて、(2)では、両構文の間に自然度の差が見られる。

(2) a. Comment avance ta thèse ? ・論文はどう進んでいるか？

b. ? Comment est-ce que ta thèse avance ? ・(同上)

これを、(3)と関連づけて考えたい。

(3) a. Ma thèse avance bien ? ・私の論文はうまく進んでいる。

b. * C'est bien que ma thèse avance ?

(3b)が不自然なのは、その意味内容が、「複数の選択肢の中から、他のものではなく、特定のものに排他的に指定する」という分裂文の機能と矛盾するからである。このような排他的指定という機能が、統語的に関連している分裂疑問文にも、ある程度継承されていると仮定することにより、(2b)の自然度の低下は説明される。

(2)に、"Marie a à moitié achevé sa thèse, et Anne a presque fini. [マリは論文を半分完成し、アンは殆ど終わった]"という先行文脈を与えると、(b)も自然になるが、これは、排他的に指定しやすい到達点が問題になったためと考えられる。

また、機械の調子に関する質問としての(4)は、(b)に自然度の低下が認められるが、機械の仕組みに関する質問としての(5)はそうではない。

(4) a. Comment marche/fonctionne la machine ? ・機械はどう動いているか？

b. ? Comment est-ce que la machine marche/fonctionne ? ・(同上)

(5) a. Comment marche/fonctionne cette machine ?

・この機械はどうやって動くのか？

b. Comment est-ce que cette machine marche/fonctionne ? ・(同上)

調子は排他的指定を受けにくい、仕組みはそうではないためであろう。

しかしながら、(2b)の"ta thèse"を代名詞化した"Comment est-ce qu'elle avance ?"は全く自然である。これは、"EST-CE QUE+CLITIC"という連辞の凍結・融合により、分裂文との統語的関連性が不透明になった結果、排他的指定という機能が継承されなくなったためと思われる。(ひらつか とおる、博士後期課程)

吉田 和彦

印欧語族のひとつであるアナトリア語派に属する諸言語は、印欧諸語のなかで最も古い時期に遡るために、比較研究において以前から注目を受けてきた。しかしながら、従来の印欧語比較研究において、実質的な議論の対象になったのはヒッタイト語のみで、他のアナトリア諸言語の事実は無視される傾向があった。その理由は、圧倒的に豊富なヒッタイト語の資料に比べて、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、パラ語、リュディア語などの断片的な資料は、祖語の再建という目標に対して何ら貢献するところがないように受け取られていたからである。ところが、状況は近年大きく変わった。これらの諸言語で記録された多くの新資料が発掘され、それにともない解読作業もはるかに進展したからである。

また、ヒッタイト語に関しても、ここ数十年の間に、粘土板が記録された時期や粘土板の性格（オリジナルか、後にコピーされたものか）を決定する基準が飛躍的に明確になってきた。この文献学的な成果に基づく、楔形文字資料の時代別分類という方法によって、従来のヒッタイト歴史文法を根本的に書き改める必要が生じている。

これまでの印欧語比較研究においては、問題となるアナトリア諸語の形式に対して十分な文献学的な配慮を施さず、それをいきなり他の印欧諸語の形式に比定したために、誤った結論に到達していることが多い。そうではなく、体系的な比較研究のためには、うえで述べたように、個々の言語の資料を実証的な立場から記述分析し、アナトリア語派内部の歴史を再構成するのが最も手堅い出発点である。

アナトリア諸言語の歴史的研究は、現在のところ、世界のほんの一握りの学者たちによって進められている。かつて、サンスクリットの発見によって、印欧語比較言語学が劇的に発展した時期があった。それまでは全く孤立しているようにみえた諸言語の形式が、サンスクリットの形式を考慮に入れることによって、歴史的な観点から有機的に説明されるようになったからである。21世紀の印欧語比較研究に向けて、ヒッタイト語をはじめとするアナトリア語派の諸言語が、かつてのサンスクリットに匹敵する重要な役割を果たすことは大いに期待できる。

（よしだ かずひこ、京都大学）

主題と条件に関する覚書

－日本語のいわゆる接続助詞「なら」をめぐる諸問題－

有田節子

日本語の条件表現に用いられる代表的な形式は、「と」「ば」「たら」「なら」の四つだが、このうち、「なら」は、名詞句に直接続くという点で、他の三つの形式から区別される。「名詞句＋なら」は、「名詞句＋は」とかなり近い意味を表すものとして扱われることが多いが、両者の違いについての分析はあまりない。

1. まず、次の現象から、「名詞句＋なら」が、「名詞句＋は」と異なり、事態を指示していることが主張できる。

①副詞を付加することが可能である。

・男ならやってみな。

→ほんとうに男ならやってみな。

cf. 男はみんな狼だ。

→ほんとうに男はみんな狼だ。（「男は、ほんとうに、狼だ」の意味しかない。）

②「名詞句＋なら」と「述語句＋なら」は、用いられる文の表現類型に相違がない。（用例省略）

2. 従来の研究では、「は」の機能を「命題が真であるための変項の範囲の規定」と分析しているが、これは、「太郎はそこにいる」という文を次のように解釈することを意味する。

(1) $x = \text{太郎}$ であれば [x そこにいる]

それに対し、「名詞句＋なら」は事態を指示するので、「太郎ならそこにいるよ」は、(1)のように解釈できず、(2)のように解釈しなければならない。

(2) [$x = \text{太郎}$] [太郎 そこにいる]

(2)の前半部と後半部は、論理的にではなく、話し手の判断（評価性判断または蓋然性判断）によって結ばれる。(1)はそうではない。

3. 「名詞句＋は」と「名詞句＋なら」は、指示物のレベルが異なることから、異なったレベルの限定の働きを持つと考えられる。すなわち、前者が判断（典型的には真偽判断）を限定する付加語で、後者が陳述を限定する付加語であることを主張する。

（ありたせつこ、博士後期課程）

吉田夏也

1:無声化の話者差

母音の無声化は日本語に特徴的な現象として扱われたり、日本語の方言の差異を記述する際の指標の一つとして用いられたりする。

しかし、この現象は日本語の音韻体系の中で考えると異音の一つとして考えられ、そのため無声化が生起する環境等にはさまざまな要因が影響しているものと思われる。

今回の発表では従来、無声化が比較的目立たないと報告されている近畿地方の出身者で、かつ外住歴のない5名の大学生が発話した単語120語を音声分析して無声化の有無とその傾向等を調べた。その結果、無声化のゆれ(ある単語を無声化したりしなかったりすること)に関しては、一人の話者の発話毎のゆれよりも異なる話者の間でのゆれのほうが大きいということが明らかになった。

また、無声化の生起する音韻環境に関しては、無声化は先行する子音の種類(調音法)よりも、後続する子音の種類に強く影響を受け、これらの子音が破裂音・破擦音である時には先行する母音が無声化する傾向が強いということ、およびこれらの子音も、無声化に与える影響の強さが話者の間で差の大きいものとそれほど大きくないものがあるということが明らかになった。

2:無声化母音の知覚

一方、無声化が狭母音に多いことの要因を日本語の音韻体系の中では狭母音の前で異音を持つ子音が多いために、無声化した母音を知覚するのが容易であることに求める説明もある。このことを確認するために、(A)無声化した母音を含む/s/、(B)無声化していない母音/u/の前の/s/、(C)母音/e/の前の/s/、(D)母音/a/の前の/s/の4種類の子音と3種類の母音/a/、/e/、/u/とを組合せて刺激音を作成し9名の被験者に対して知覚実験を行った。その結果、(B),(C),(D)はいずれも(A)と聞き取る被験者が多く、また(A),(B),(C)の各子音に母音/a/を後続させると/sa/と聞き取る被験者が圧倒的に多かったことから母音の種類によってはその情報が子音部分にも含まれているとはいえないということが明らかとなった。また子音部の後半部を切断した刺激音は子音の他の部分を切断したものより後続する母音の知覚に影響が小さかったことから、無声化を起こした母音の情報は直前の摩擦音の終端部に含まれ、無声化母音の直前の摩擦音は無声化をしていない母音の直前の摩擦音とは異なる性質を持っていることが明らかになった。

(よしだ なつや、博士後期課程)

定延利之

1. 文が表す事態において、2つのモノが大体等しい位置を占めるなら、その2つのモノを表す2名詞句を相互交換した文も大体同義になる。たとえば文(1a)が表す事態において馬場と猪木は大体等しい位置を占めるので、2名詞句馬場・猪木を相互交換した(1b)も(1a)と大体同義になる。(2)についても同様。([]印は等位構造)

(1)a. [馬場と猪木]が戦った。 (2)a. [彼と彼女]が手紙をくれた。

b. [猪木と馬場]が戦った。 b. [彼女と彼]が手紙をくれた。

ここで言う等(しい)位置には潜在的には4タイプ有る。(1)(2)に即して(3)に示す。

(3)a. 馬場対猪木という1つのシングルマッチにおいて馬場と猪木が占める等位置

b. 馬場・猪木組対他の組(例えばブッチャー・シーク組)という1つのタッグマッチにおいて馬場と猪木が占める等位置

c. 2試合(馬場対ブッチャー)(猪木対ブッチャー)を通じて馬場と猪木が占める等位置(「今年は誰がブッチャーと戦った?」という質問に答える場合など)。彼から1通、彼女から1通、計2通の手紙が来た場合に彼と彼女が占める等位置。

d. 彼と彼女の2人が合作した1通の手紙が来た場合に彼と彼女が占める等位置。(1ab)が(3d)タイプを表さず(2ab)が(3ab)タイプを表さないのは述語の影響である。

2. (1)(2)のような等位構造の文だけでなく他文型に属する(4)(5)のような文も、等しさの程度は落ちるが(3a)及び(3b)タイプの等位置を表せる。従来(5)のような二の文は(1)(2)(4)等と違って等位置を表せないとされてきたが、「2つのモノのどちらが表現者の注意をより惹いているか」に関する違いを捨象して(4)に等位置((3ab))を認める以上、(5)にも等位置((3a))を認めるべきである。(5)のように述語(平行だ)の2つのモノが等位置を占めると規定する力が強い(=対称性が高い)場合は、二の文でも等位置を表せる。文の対称性の高低は、述語の対称性・テンス/アスペクト要素の対称性・修飾語句の対称性・ムード形式の対称性・文型の対称性・名詞句の対称性といった各種の対称性の高低を総合して決まるのであって、文型だけでは決まらない。

(4)a. 馬場が猪木と戦った。 (5)a. 線分Aが線分Bに平行だ。

b. 猪木が馬場と戦った。 b. 線分Bが線分Aに平行だ。

3. 等位置のタイプ間の違いは基底生成的なものである。タイプ間の違いを文の派生過程の違いに還元する説は(5)のような二の文に適切な派生経路を設定できない上、文皆が敵味方に分かれて戦ったが(3a)相当の等位置を表せることも説明できず不当である。タイプ間の違いを、名詞句が担う深層格の違いに還元する説も、表現者の注意に深層格が立ち入る結果を招き不当である。(さだのぶとしゆき、神戸大学)